

まいど！ざいむ局です！



関西元気企業

～ ゆばブームを巻き起こせ ～

今回ご紹介する企業は、「日本の湯葉のふるさと」比叡山延暦寺御用達、「比叡ゆば」を製造・販売している株式会社比叡ゆば本舗ゆば八です。

社長自らが広告塔となり、「ゆばブームを仕掛ける」と新たなイベント企画と斬新な新商品開発を行い、伝統食体験の一貫として滋賀県の学校給食へ供給したり、今では世界的に有名なシェフともコラボしています。

そんな「ゆばブームの仕掛け人」、八木社長にお話をお聞きしました。

●社長就任のきっかけは。

私は、結婚を機に勤めていた金融機関を退職し、その後は、主人が社長を務める当社で主に経理の仕事を行っていました。

そんなある日、突然、主人が倒れ、そのまま帰らぬ人となってしまったのです。私はその時49歳、息子はまだ高校三年生になったばかりで、生活のためにも私が継ぐしかないと思い、社長に就任しました。

●「ゆばブームを仕掛ける」とは。

主人（先代社長）は、日々製法の研究を重ね、特許技術まで取得するなど、職人肌の人間でした。私には主人と同じような経営はできませんので、ただただ、ゆばを日本中、世界中の人に食べてもらいたい、そのために自分のできることは何かと考え、イベントの企画・商品開発に特化したのです。

私が社長に就任した1996年当時は、ゆばという食材は高級料亭で少し食べられている程度のまさに「珍味」でしかありませんでした。

企業情報

名称 株式会社 比叡ゆば本舗ゆば八
所在地 滋賀県大津市中央4丁目3-10
創業 1940年
代表者 八木 幸子
従業員 77名 資本金 25百万円
HP <http://hieiyuba.jp/>



【代表取締役 八木 幸子氏】

私はゆばが珍味である限り、需要は伸びない
と思い、ゆばを広く一般的に普及させようと、
様々なイベントや新商品開発を実施しました。

まず、ゆばという食材の調理方法が分からな
いと、一般家庭の食卓で食べてもらえないと思
い、地元の女性（主婦）を集めてゆば料理教室
を開催しました。

また、次にゆば工場見学ツアーを開催。これ
は、工場でゆば作りを見てもらい、その後取引
先のレストランで、ゆば料理を堪能してもらっ
て、ゆばへの親しみを持ってもらおうというも
のです。今では修学旅行など学生を含め、年間
5000人が訪れる人気の企画となっています。

商品の開発では、女性ならではの視点から、天然着色料を使用し、赤・黄・緑色の彩
り豊かな「三色きざみゆば」を開発しました。また、私自身が介護に苦勞した体験から、
介護食用に「豆乳おからうどん」を開発しました。おからは、食物繊維が多く、介護で
苦勞する便通にも効果があり、重宝されています。

これまでも自分は「歩く広告塔だ」と思って行動していましたが、今ではテレビショ
ッピングにも出演しています。



【本社風景】

●経営の中で最大のピンチは何ですか。

2002年12月に、突然取引先の社長から留守電がありました。なんだろうと思い聞いてみると、当社がOEMで製造している商品の紙箱に使用が禁止されている蛍光塗料が含まれているということでした。

当時は大手食品会社の集団食中毒事件の問題などもあって、食の安全に対して厳しくなっていた時期でした。

ゆばの原材料に関しては管理を徹底していましたが、まさか紙箱からそんな問題が出る
とは思っていませんでした。まさに青天の霹靂で、翌日には新聞に掲載され、最終的
には2万点以上の商品回収を余儀なくされました。

ピンチの時には、素早く、そして誠実に対応することが肝要です。特に都合の悪いこ
とを隠さない。後から新事実が出てくるようでは、どこまでが本当なのかと関係者は疑
心暗鬼になってしまいます。そうならないように、最初にすべてを明らかにする。その
上で「残りは問題ない」とした方が信頼回復は早まります。

事実関係を徹底的に洗い直し、指摘された商品以外にも全商品を自主点検しました。
その結果、同じような問題のある品がもう1点あることが判明し、公表して回収したの
です。

新聞への謝罪広告では、正直だったことが評価され、激励の言葉をたくさん頂きました。

正に、「ピンチはチャンス」なのです。転んでもタダで起きてはいけません。この時、私は「第2の創業の機会だ」と捉え、「町工場から企業への転換」を標榜し、パッケージの見直し、デザイン等を一新するなど、イメージの刷新を行いました。

更には、他社が出す新聞のお詫び広告は、必ずチェックしています。お詫び広告ほど参考になるものはありません。自社にも当てはまるような内容なら、すぐに改善をする。それだけでも未然に事故を防げるのです。



●社長はいつも前向きですが、元気の源は何ですか。

【社員風景】

昔はとてもマイナス思考でした。完璧主義で何か「ミスをしていないか」という方向にばかり目が行ってしまっていたのです。

特に、子育てと仕事の両方に全力となり、1人目を出産した時は、生後3ヶ月から子供を連れて入社、2人目が産まれた時は、帳簿を家に持ち帰り、子育ての傍ら家で仕事をこなしていました。その時は午前2時に寝て、朝5時に起きるような生活をしていましたので、過労で3回も倒れてしまいました。

発想の転機となったのは主人の死です。死と向き合って「人間の命は限りあるもの」と感じ始めた時から、全ての物事に感謝ができるようになりました。

大量のリコールのような大ピンチも、当社が生まれ変わるチャンスと捉えると乗り越えることができましたし、未熟の「み」は魅力の「み」と自分に言い聞かせて、失敗する自分も可愛いと思えるようになり、生きるのが楽になりました。

●若手経営者へ向けてメッセージをお願いします。

「いい加減だと言いつけが出る」、「中途半端だと愚痴が出る」、「真剣だと知恵が出る」。感謝の心を忘れず、目の前のことに一生懸命取り組んで、あとは、天に任せていけば一番良い時期に夢は必ず実現します。

<取材後記>

ゆばは、約1200年前に伝教大師最澄が中国から仏教とともに持ち帰り、その後、貴重な滋養食、蛋白源として、厳しい修行に励む僧侶たちの体を支えてきたといわれている。

それにしても、八木社長はパワフルだ。ゆばを一般に広めようと、新商品を開発したり、料理教室、工場見学を次々と始めたり、ゆばの普及活動に余念がない。

今回の取材中、八木社長は眩しいぐらいに輝いて見えた。生き生きとしたその話しぶりに、ただただ圧倒されるばかりであったが、彼女の話を知っていると、こちらの気持ちがだんだん明るくなっていくから不思議である。

自分自身の置かれている場所や立場でベストを尽くしている人は輝き、そして周りも明るくする。

正に、『一隅を照らす』、伝教大師最澄の教えである。

掲載している情報は、平成25年4月時点のものです。